

〔シンポジウム〕

## 実践からの構築を目指して 司会のことば

浜松医科大学看護学科

石垣和子

福島県立医科大学看護学部

原礼子

本学会発足後まだ日が浅いが、家族看護学は急速に時代から期待される学問として注目されていることを学会員全員が感じ始めているのではないだろうか。期待される役割を担えるような学問として、家族看護学をどのように構築したらよいかという命題に少しでも近づこうという目的でこのシンポジウムを計画した。

すなわち、精神、母性や小児、老人、がん、在宅、地域など、多くの看護領域で家族を扱う熟練者が育ち、継承してきた家族に対するスキルや成果を統合し、多彩な場面での実践に役立つものとして方法論を開発・再構築し、普遍化し、もって家族看護学を体系化することに向けて、そのような視点を持って活動しておられる3人のシンポジストと、一人の特別発言者をお迎えした。病院の臨床看護現場から戸井間氏、地域での保健活動現場から星野氏、そして現場とタイアップしつつ家族看護学を研究している立場から渡辺氏、さらにアメリカの Family Nurse Practitioner 教育と実践の実情を良くご存知の Phyllis R. Esterling 氏である。なお、当初の企画ではこれに加えて日本の基礎教育における家族看護学の教育実践についても重要な柱と考えたが、実現できず残念であった。アメリカの Family Nurse Practitioner については会員の関心が高いことを配慮し、その事情をつか

んだ上で翻って日本の家族看護構築に役立てたいと考えた次第である。通訳には金沢大学の牧本氏をお迎えした。

各シンポジストの発言については後ページに譲るが、いずれのシンポジストからもそれぞれの実践事例が紹介され、学会員が「家族看護」に看護職としてのプロ意識を持ち、実践に研究的に取り組み、事例検討などの検証の場を持ち、緻密にそして注意深く考えることの重要性が語られた。

家族インタビューによる介入については（毎年カルガリーへ行つての研修も盛んのようなのであるが）、家族看護学の一つの介入方法として会員の間でも少なくとも意識の上では定着しつつあることが感じられた。ディスカッションではその評価について関心が持たれた。実践者に感じられる手応えをいかに客観化するかが課題とされた。また、現場にはそこから家族看護学が体系化できそうな立派な家族看護実践例が眠っていること、それらを持ちよる事の大切さへの気づきはあるが、面的な広がりを持つためには大学人の果たす役割もあることが指摘された。

家族看護学の構築にはまだ多くの努力が必要と思われるが、学会員の一人でも多くがこのシンポジウムからなにかを得ることができたとすればありがたい。